

接続語の多義性—so と though を例に

松尾文子

1. はじめに

接続語（接続詞，副詞）は文と文との間の意味的・語用論的なつながりを示す機能を持つ。つながりを理解するには，単に語や文の意味だけではなく，広く文脈を読み取る必要がある。文脈を読み取って適切な接続語を用いるには，話し手（書き手）の主体的な関わりが必要である。

また，同一の接続語でさまざまなつながりを示すことが可能で，接続語には多義性がある。本論では接続詞の so と接続副詞の though を例にとり，接続語の多義性を考察する。なお，so や though でつながれる文（に相当するもの）で接続語の前に来るものを X，後に来るものを Y とする。

2. so

2.1. 因果関係を表す

接続語の so は副詞からの転用で，Old English に現れ，「とても～なので…」の意味を表す so～that … 構文も Old English で見られる。so の中核的意味は「因果関係を表す」である。すなわち，X で述べられる原因や理由で Y という結果に至るということである。

(1) I had a headache, so I went to bed. —LDOEC²

ここでは X と Y の二つの事態がつながれており，そのつながりは因果関係

である。話し手の主観とは無関係な客観的な連結である。

2.2. 推論を表す

Xから推論した結果がYで述べられる場合がある。¹⁾Xでは話し手がYであると判断する根拠が述べられており、話し手の命題態度を修飾している。

次例は‘I’があるパーティで会った女性が誰かを思い出せず、探りを入れている場面である。

- (2) “And how’s the family?” I asked, not sure if she even had one.
“They’re all well,” she replied. No help there. “And how is Louise?” she inquired.
“Blooming,” I said. So she knew my wife.

—J.Archer, *The Luncheon*

X「家族は元気かと尋ねると、Louiseはどうかと聞いてきた」ので、話し手はY「彼女は妻を知っている」と推論する。

(2) のようにXが実際に発話された情報（言語的文脈）ではなく、その場の状況を根拠にYを推論する場合がある。例を見よう。Tracyは無実の罪で投獄された監房から独房へ移され、その後再び元の監房へ戻った。Paulitaはそこにいる女囚である。

- (3) Paulita grinned with surprise when she saw Tracy. “So you came back to us, pretty pussy. You liked what we did to you, huh?”
—S.Sheldon, *If Tomorrow Comes*

PaulitaはTracyの姿を見て、X「彼女がそこにいるという事実」からY「また戻って来たんだ」と結論づけている。

soを疑問文と共に用いると、Xを根拠に推論によって導き出した結論Y

を確認する場合がある。平叙文の語順で疑問文の機能を果たす型が多い。次例は「英米の新聞はあなたがCIAの要員だと報じている」と記者に言われたRyanとDaily Mirror紙の記者のやりとりである。

- (4) “I read this morning. It was as much a surprise to me as it was to anyone else.” Ryan smiled. “Somebody made a mistake. I’m not good-looking enough to be a spy.”

“So you deny that report?” asked *the Daily Mirror*.

—T.Clancy, *Patriot Games*

RyanがX「その報道は間違いで、自分はスパイになるほど恰好よくない」と答えたことから、話し手はY「あの報道を否定する」を導き出し、それを確認している。

しかし、常にXからYの結論をスムーズかつ正確に推論できるとは限らない。その場合には、話し手は相手に結論を問うことがある。次例は海軍兵学校の教官のRyanとCIAの情報担当副長官が射撃練習場らしき所に三人の男が立っている写真を見ている場面である。‘they’は謎のテロ組織を指す。

- (5) “Your last paper on them said they were more militarily organized than some of others, remember? Every one of them, as far as we can tell, is skilled with weapons.”

“So?”

“Think!” Cantor snapped. Ryan gave him a blank look.

“Periodic weapons-refresher training, maybe?”

—T.Clancy, *op.cit.*

長官はX「問題のテロは軍隊なみに組織されていること、武器の取り扱いに熟練していること」、そして射撃場らしき写真からRyanにある結論を導

き出して欲しいと思っている。ところが、Ryan は長官の示す根拠から推論すべき結論がわからないので、‘So?’ と問い返している。‘So what?’ の型も同様に用いられる。

このような機能では、X から Y を導き出すには推論という話し手の主体的な関わりが必要である。

2.3. 発話行為をつなぐ

so には発話行為をつな機能がある。話し手が Y を命令する、質問するといった発話行為を行う根拠が X で示される。すなわち、ある発話行為を適切に遂行するための根拠が X で示されているのである。

まず、命令の発話行為をつなぐ場合を見る。次例は FBI の特別捜査官の Werner が FBI の人質救助チームのヘリコプターの乗員に出動の指示をする場面である。‘they’ は FBI の対テロ班である。

(6) “Okay, listen up,” Werner said. “They sent an advance team in Hagerstown. The chopper’ll be here in half an hour.”

“There’s a severe thunderstorm warning,” one objected lightly.

“So take your airsick pills,” Werner advised.

—T.Clancy, *op.cit.*

部下の一人が出動に気乗りせず、X 「激しい雷雨が来る予報が出ていますが」と反論したので、話し手 (Werner) はその中をヘリコプターで飛ぶと激しく揺れるだろうと推論し、Y 「乗り物酔いの薬を飲め」と命令する発話行為を行っている。

次に質問の発話行為の例を見る。次例は家出した妻が、残して行った敷物を取りに行ってもよいかと夫 (Macon) に電話してきた場面である。

(7) “Macon, are you there?”

“Yes, I’m here.”

“So would you mind if I came and got it?”

“No, I guess not.” —A.Tyler, *The Accidental Tourist*

妻は夫の反応がないので、「聞いてるの？」と尋ねる。X「夫が聞いていること」を確認して、妻はY「取りに行ってもよいか」と質問する発話行為を行う。

同様の例をあげる。ロンドン警視庁の対テロ班を率いる警視長が古書店にしかけた盗聴テープを聞いている場面である。Cooleyは古書店の店主である。

(8) “Good morning, sir!” It was Cooley’s voice.

“And to you,” said the second. “Well, have you finished the Marlow?”

“Yes, I have.”

“So what’s the price?” —T.Clancy, *op.cit.*

客が Marlow の稀覯本の値段は決まったかと聞いたので、店主はX「決めました」と答えた。それで話し手である客はY「いくらか」と質問する発話行為を行う。

このような機能では、Xを根拠にYを発話する発話行為を行うが、そこには話し手の発話態度を表すという話し手の主体的な関わりがある。

2.4. 談話構成上の機能

soは談話構成上の機能を果たす場合がある。まず、発言権の獲得を示す例をあげる。

(9) It was Molly who finally took the initiative.

“So,” she said, offering her hand. “It’s good to see you again.”

—T.Cristofer, *Falling in Love*

‘took the initiative’ という語句に注意されたい。

本筋から逸れた話題を本題に戻す合図として so が機能する場合がある。

- (10) “So.” Platonov changed gears smoothly. “What did you really think of Professor Hunter’s little speech?” —T.Clancy, *op.cit.*

「スムーズにギアを変えた」とあるように、話題を転換して本題に入る合図として so が用いられている。この用法では so の後にポーズが置かれ、下降音調になる。

同様の例をあげる。この用法では anyway と共起する例が多く見られる。

- (11) Sarah pulled her coat on, making sloppy job of it. One corner of her collar was tucked inside. “So anyway,” she said. “This is what I wanted to tell you: I’m having John Albright send you a letter.” —A.Tyler, *op.cit.*

この anyway は「それていた話をもとに戻して、いよいよ話の本題に入ることを示し、『とにかく、それはそうとして』という気持ちで話し手が本当に言いたいことを切り出す」(Schourup & Waida 1987: 44) のに用いられ、コンマを伴って文頭で用いられる。また、anyway がコンマを伴って疑問文の後で用いられることもある。

so が一連の会話の切り上げの合図として用いられることがある。

- (12) “So that’s it,” Vincent Lord concluded ten minutes later.

—A.Hailey, *Strong Medicine*

‘concluded’ に注意されたい。

このような機能では、so は先行文脈と当該の発話を結びつけるというよ

りも, so 自体が一つの独立した談話レベルの標識になっている。

3. though

3.1. 逆接的關係を表す

though の中核的な意味は *OED* によると「二つの相反する (現実, あるいは仮定の) 出来事や状況の關係を示す反意小辞 (adversative particle)。一方の出来事や状況は他方が起こることを妨げるには不十分で, したがって予想に反して両者が同時に起こる」である。すなわち, X と Y が逆接の關係にある。

- (13) a. He is poor. He is happy, *though*. (副詞)
b. *Though* he is poor he is happy. (接続詞)
c. He is happy *though* he is poor. (接続詞)

—Greenbaum (1969: 67)

(13a) は副詞, (13b) (13c) は接続詞を用いているが, 論理的にはこれらの三つの文は等しいとされる。本論では副詞の *though* を対象にする。ここでは X 「彼は貧しい」ならば, ふつう幸せではないだろうという予想に反して, Y 「彼は幸せだ」と述べられている。

二つの相対立する事態が *though* によってつながれている例を見る。

- (14) He tried to speak: his mouth opened and closed. There was no sound, *though*, simply the gurgling in his chest.

—S. Smith, *A Simple Plan*

X 「しゃべろうとして口を開け閉めした」けれど, 予想に反して Y 「声はでなかった」のである。

X と Y が相対立する關係にあることがより明示的であるのが, 次のような対照的な二つの事態を述べる例である。

- (15) I never get lost driving in Chicago. If I can't find the lake or the Sears Tower, the L tracks orient me, and if all else fails, the x-y street coordinates keep me on target. Out here, *though*, there were no landmarks. —S.Paretsky, *Bitter Medicine*

‘x-y street’ はグラフの xy 座標のように走っている道路のことで、ここでは車を運転するときの状況が述べられている。X「シカゴ市内には道に迷わないように目印がある」とY「この郊外では目印がない」の二つの対照的な事実が並べられている。シカゴ市内の状況と郊外の状況とを対比させており、‘in Chicago’ と‘out here’によって、比べる対象が明示されている。

この機能ではXとYの二つの事態がつながれており、そのつながりは逆接的な関係で、話し手の主観とは無関係な客観的な連結であると言える。

3.2. 推論を表す

Xから推論した結果がYで述べられる場合がある。Xでは話し手がYであると判断する根拠が述べられており、話し手の命題態度を修飾している。ただし、通例ならばXからYとは逆の内容の結論が導き出されるはずである。

坪本 (1998) によると、文連結には次のような二つの意味関係を二極化した方向性が考えられるという。²⁾

- (16) 必然的文連結 ← 文連結 → 偶然的文連結 —坪本 (1997: 106)

「必然的文連結」とは、「定方向」に代表されるように、二つの事象が一定の原則に従えば必ず成立するような意味関係にある場合である。so はこれにあたる。一方「偶然的文連結」とは、「不定方向」に代表されるように、二つの事態がたまたま時間と空間を共有する場合である。though がこれにあたる。XのあとYにならないと、どのような事態が生じ、話が展開する

のか予測がつかないのである。したがって *though* でむすばれた場合は、X で述べられる根拠からは予測できない結論の Y が述べられることになる。

例をあげる。次例は株のブローカーと投資家の会話である。投資家は Ajax 社の株を数千株注文するつもりであった。

(17) “... Are you still interested (in an investment)?”

“I’m not in any hurry to invest. I guess I should make up my mind about Ajax in the next day or so, *though*. ...”

—S.Paretsky, *Killing Orders*

X「投資を焦っていない」のであれば Ajax 社株に関してもすぐに決めないというのが順当な結論である。しかし実際は予想に反して、Y「一両日中に決断しなくてはならない」という結論が述べられている。

同様の例をあげる。Susan は話し手の恋人で、話し手は彼女との結婚を望んでいるが、彼女は今すぐには思っていない。

(18) “People shouldn’t get married unless they are both sure they want to,” I said.

“Of course, not,” Susan said.

“Would have been fun, *though*,” I said.

“Yes.”

—R.Parker, *Paper Doll*

X「双方が望まなければ結婚すべきではない」ならば、一方が結婚を望んでいない現状では結婚しても楽しくないはずである。しかしそれとは逆の Y「結婚してみれば楽しいかもしれない」という結論が述べられている。

so とは文連結の方向性の違いがあるが、X から Y を導き出すには、推論という話し手の主体的な関わりが必要である。

3.3. 発話行為をつなぐ

though には発話行為をつなぐ機能がある。話し手がYを発話するという発話行為を行う根拠がXで示されている。すなわち、ある発話行為を適切に遂行するための根拠がXで示されるが、though の場合は偶然の文連結であるから、Xという根拠でYを発話するのは予想外のことである。例を見よう。

次例は詐欺師仲間が集まってバーの奥で numbers game をしている場面である。バーにやって来た刑事を覗き窓から見て、Bourdeau が Twist に尋ねる。

(19) BOURDEAU: Twist, you know this guy?

TWIST: No, I never saw him before. He's a dick, *though*.

—*The Sting* [映画台本]

ふつうX「彼を見かけたことはない」ならば、Y「彼は刑事だ」という主張はできないはずである。しかし予想に反して、Yを主張している。

次は命令（あることを勧める）の発話行為の例である。三人がクラブで一緒に昼食をとっている場面である。

(20) She looked at her watch. "I've got to get back to the office."

She signaled for a waiter and signed the bill. "You two stay *though*."

—S.Paretsky, *Killing Orders*

話し手は、X「私はオフィスに戻らなければならない」であるけれど、Y「あなた方二人はゆっくりして下さい」を勧める発話行為を行っている。

次に質問の発話行為の例を見る。Tは株券偽造に関わる事件を捜査している私立探偵で、何度か脅迫を受けている。友人のLottyが訪ねて来たときにも、修道院に近づくなどという脅迫電話がかかってきた。その電話を録音したテープを再生する場面である。

(2) I played the tape back for Lotty. She looked at me soberly.

“You don’t recognize the voice?”

I shook my head. “Someone knows I was at the priory yesterday, though. And that can only mean one thing: One of the Dominicans has to be involved.”

“Why, *though*?”

“I’m being warned off the priory,” I said impatiently.

—S.Paretsky, *Killing Orders*

探偵がX「ドミニコ会の誰かが関係しているに違いない」と述べたのを聞いて、話し手(Lotty)はY「(一体)何故(そう思うのか)」と質問している。話し手はXから納得できるような結論を導き出せないのである。

(2)のように疑問文と共に *though* が用いられると、強調の意味 (*indeed, truly*) を表す場合がある。これは *though* による文連結は偶然の文連結であることにも起因する。必然的文連結とは異なり、偶然の文連結では二つの事態がたまたま時間と空間を共有し、したがって偶発性や突発性といった特別な意味合いが生じる (cf. 坪本)。話し手は相手の発話内容に納得できないで問い返すということ、*though* が偶然の文連結の機能を果たす語であることから、強調の意味が生じる。

Xの根拠があるにもかかわらず、話し手はYを発話する発話行為を行うのである。soと文連結の方向性は異なるが、話し手の発話態度を表すという話し手の主体的な関わりがある。

3.4. 談話構成上の機能

though には談話構成上の機能もある。それまでの談話の流れを変えて話題を転換し、新たな話題を提示する機能である。例を見よう。ドイツの石鹼会社のアメリカ支社はこのところ業績不振である。そこで大規模な宣伝活動などのために社長が来ることになった。それに備えた会議でのやりとりである。

- (22) “... This will be a total campaign—PR, publicity, collateral and all the rest. You know what I mean? First, *though*, we’ll be writing his speeches so that he can pep up his executives here. ...”

—J.Engelhard, *Indecent Proposal*

‘we’は企業の宣伝活動などを請け負う会社で、スタッフには speechwriter もいる。PRを含めて総合的なキャンペーンを展開するが、その前にまずアメリカ支社の重役たちの士気を高めるような演説を社長のために作成しなければならない。これまでの談話の流れXからすると、PR活動の具体的な内容を討議することが予想されるが、その流れから逸れてY「社長の演説原稿の作成」に話題が移る。話題の列挙を示す‘first’という語が共に用いられている。

次は談話の展開を示す例である。Martinique島の貴族の老婦人が島に旅して来た男に向かって言う言葉である。二人は島民について話をしているが、男が島民はとっつきにくく厳しい表情をしているような印象があると述べたのに対して、老婦人は次のように言う。

- (23) “Some of us have serious expressions. Generally speaking, *though*, do you find the population attractive?”

—T.Capote, *Music for Chameleons*

話し手はX「島民の中にはとっつきにくい感じの人がいる」を認めた上で必ずしもそうではないと反対の意見を持ち、Y「一般的に言って、島民は魅力的だと思いませんか」と述べ、話題を展開させている。

このような機能では、thoughは先行文脈と当該の発話を結びつけるというよりも、though自体が一つの独立した談話レベルの標識になっている。ただsoとは異なり、thoughは基本的には逆接的關係を示す語であること、偶然の文連結の機能を果たす語であることから、談話の流れを変えるはたらしきをする。

4. おわりに

文連結の方向性は異なるが, so と though はそれぞれ因果関係, 逆接の関係を表すという基本的な意味から, 推論を表す(命題態度を修飾する)機能, 発話行為をつなぐ(発話態度を修飾する)機能, 談話構成上の機能が派生する。話し手の主観とは無関係な客観的な連結から話し手の命題態度や発話態度の連結へと向かう過程では, 話し手の文脈への主体的な関与が見られる。

注

- 1) so は文脈含意(contextual implication)を導入する語でもある。詳細は Sperber & Wilson (1995), Blakemore (1987, 1988, 1992) を参照されたい。
- 2) 詳細は坪本 (1997) を参照されたい。

参考文献

- Ball, W.J. 1986. *Dictionary of Link Words in English Discourse*. Macmillan.
- Blakemore, D. 1987. *Semantic Constraints on Relevance*. Blackwell.
- Blakemore, D. 1988. "So' as a Constraint on Relevance." In R.M.Kempson ed. *Mental Representations: The Inference between Language and Reality*. 183-195. Cambridge University Press.
- Blakemore, D. 1992. *Understanding Utterances: An Introduction to Pragmatics*. Blackwell.
- Greenbaum, S. 1969. *Studies in English Adverbial Usage*. Longman.
- 松尾文子. 1993. 「談話接続語としての so」衣笠忠司・赤野一郎・内田聖二(編)『英語基礎語彙の文法』191-202. 英宝社.
- 松尾文子. 1997. 「接続副詞 though の機能」『六甲英語学研究』第 1 号. 1-13. 六甲英語学研究会.
- 中野弘三. 1997. 「意味変化の一方方向性仮説についての一考察」*Conference Handbook 15*. 171-174. English Linguistics Society of Japan.
- Quirk, R., S.Greenbaum, G.Leech and J.Svartvik. 1985. *A Comprehensive Grammar of the English Language*. Longman.
- Schourup, L. and T.Waida. 1988. *English connectives*. くろしお出版.
- Sperber, D. and D.Wilson. 1995. *Relevance: Communication and Cognition*.

(2nd edition) Blackwell.

坪本篤朗. 1997. 「モダリティと発話行為」中右実(編)『日英語比較選書 3』研究社出版.